

この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教ください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 神 吉 晴 夫

長編推理小説 ^{かぎ あな}鍵孔のない扉 ^{とびら}

昭和44年6月20日 初版発行

昭和44年7月10日 10版発行

検印廃止 ￥ 350

著 者 ^{あゆ}鮎 ^{かわ}川 ^{てつ}哲 ^や也
神奈川県鎌倉市極楽寺2-15-11

発 行 者 神 吉 晴 夫

印 刷 者 磨 田 照 雄

東京都文京区水道 2-4-26

慶昌堂印刷

発 行 所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(岩淵製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Tetuya Ayukawa 1969

長編推理小説・書下ろし

かぎ あな とびら
鍵孔のない扉

あゆ かわ てつ や
鮎川哲也



カッパ・ノベルス

目次

一	桜莊七〇五号室	5
二	木曜日の女	22
三	ある証言	40
四	エックス氏	58
五	予告電話	76
六	松に歌うは	86
七	いやな予感	107

八	靴	127
九	夜に聞く	147
十	女按摩	165
十一	蔵王	181
十二	浪曲嫌い	192
十三	ボストンバッグ	212
十四	夜の掃除夫	231

本文のイラスト・中本達也

一 桜莊七〇五号室

1

鈴木夫妻はどちらも音楽家である。

アルトの久美子も伴奏ピアニストの重之も、ともに新樹会に属していた。黄痘を病んでいるように皮膚の色のさえない、どこか野暮ったいところのある夫に対して、久美子は肌の色が浅黒く、野生的にかがやく大きな眼を保持していた。なにかの拍子に、その眸は敏捷な反応をみせてきらりとかがやく。べつに肉感的でもなく、どちらかというと瘦せているほうなのに、彼女の容姿はしばしば多情な男の眼をひいた。

三月の、暖かい日曜日の午さがりだった。朝食と昼食とをかねた食事をすませたあと、重之はそのまま食堂に坐りつづけて週刊誌を読んでいた。

扉があき、久美子が声をかけた。

「練習はじめましょうか」

「そうだな」

と、機械的に腕時計をみた。一時半になろうとしている。重之は週刊誌をテーブルに伏せると、久美子につづいて階段をのぼった。

二階の音楽室は客間をかねている。四十五平方メートルの小さなホールであった。扉の右によせて黒いグランドピアノがおりてあり、それを挟むような形で二方の壁がつくりつけの書棚になっていた。さすがに音楽関係の書物が多く、その半分は楽譜であった。それも、オペラや歌曲の楽譜が大半を占めている。将来、久美子の声が衰えてきたときは、ここを教室として弟子をとることにしてあった。

重之が楽譜をひろげているあいだに、久美子は窓をとじてまわった。近所から苦情がでないように、防音装置がしっかりしている。窓をしめさえすれば、音はほとんど洩れない。

新樹会では、レコード会社からの依頼で日本歌曲を録音することになっていた。片面八曲ずつ、両面あわせて十六の歌曲を、それぞれ違う歌手によって歌って欲しいという注文だった。

新樹会には伴奏ピアニストが三人いる。重之が割り当てられたのは男声が二人と女声が三人だったが、女声のなかの一人は妻の久美子であった。夫婦だから心がかよい合っている演奏ができるに違いない。マネジャーもレコード会社のディレクターも、そう考えて二人を組ませたのである。

重之たちが担当したのは、『あした浜辺をさまよえば……』ではじまる、林古溪^{はやしこけい}作詞、成田為三^{なりたたけさう}作曲の『浜辺の歌』であった。大して難しい曲ではない。が、練習所へ行って人びとの前で練習をするまでに、いちおうの基礎をつくっておいたほうがいいのではないか。久美子に、重之はそう提案していたのである。しかし、二人のスケジュールが食い違っているために、約束は二日三日と延びてしまい、夫婦がそろって練習するのはこれが最初であった。

いつものように久美子の発声練習がすむと、重之は『浜辺の歌』の前奏を弾^ひきはじめた。寄せ返す波をえがいたと思われる、美しい分散和音^{ぶんさんわおん}が流れていった。第一節を歌ってしまうと、まだピアノが鳴り終わらぬうちに、久美子がクレームをつけた。テンポが遅すぎるとい

「そうかな。ぼくはこれが妥当な速度だと思いがな」
「そんなことなくてよ。だらだらしてるわ」

文句をつけるとき彼女は、唇^{くちびる}をへの字にむすぶ癖^{くせ}があった。

「しかしね、これは病後の女性が砂浜をさまよっている歌なんだぜ。本人はまだ健康体にもどっていないんだ。その上、砂というのは歩きにくいものだ。どうしてもこの程度のテンポになるよ」

「実際に歩くときはそうでしょうよ。でも歌の場合はちがうわ。遅すぎると曲が死んでしまうじゃないの」

そんなことはないと言うふうに、重之ははげしく首をふった。だが肝心の楽譜にはメトロノームによる速度の指定がなく、ただ、*Andantino*（ややゆっくり）と記入されてあるだけだった。こうなると、伴奏ピアニストは独唱者の解釈にしたがわなくてはならないことになる。重之は無精ヒゲの生えた黄色い頬^ほをふくらませながら、いくぶんテンポを早めて前奏を弾きはじめた。

一番の歌詞が終わると後奏がつづく。そしてふたたび前奏にもどって二番の歌詞に入るのだが、久美子はそのでまた注文をつけた。

「後奏が終わって前奏に移るとき、切れ目を入れて頂戴^{ちやうだい}」

「こうかね？」

後奏を弾きなおし、ペダルをちょっと離すと、短い終止をいれてから前奏にもどってみせた。

「それは大袈裟よ。ほんの少し、ぶつんと切れるだけでいいの」

「判ったよ。きみの好きなようにやるけれども、ぼくは切れ目なんかいいほうがいいと思うな。切ると、音の流れに渋滞ができるからね」

重之はほそい眼で妻を見上げ、不満そうに抗議した。

「あたしは知らだらしたのが嫌いなよ。伴奏が終わって二番の歌詞に入る前には、やはりそこでけじめをつけて欲しいの」

「ふむ」

「それからまだ言いたいことがあるわ。全体にレガートをつけて弾いてよ」

この最後の一言が重之のプライドを傷つけた。曲の内容が内容だから、妻に言われるまでもなく、その点にも意を用いて弾奏したつもりなのである。

だが彼は、怒ることはしなかった。久美子の高慢なもの、の言い方には慣れてもいたし、なかば諦めてもいたからだ。

「判ったよ。練習をつづけようじゃないか」

と、押えた口調で言った。

一番と二番を終わり、三番の歌詞に移ったとき、重之は不意に指の動きを止めた。

「ちょっと。いま『早や忽ち波を吹き』と歌ったように聞こえたがね」

「そうよ」

「そいつは訝しい。ぼくが記憶している歌詞は『はやち忽ち波を吹き』だったぜ」

「それはあなたの記憶ちがいよ。少しぼけてきたんじゃない？」

なにかというと、久美子は夫を老人扱いした。彼の眠そうな風貌から受けるじじむさい印象を、そう言って揶揄するのだった。だが、いまの一言はいつになく棘があった。口調に冷笑するようなひびきが含まれていた。

「読み違えていやしないわよ。ほら、みてご覧なさい」

と、彼女は挑むような言い方をして楽譜をつきだした。見ると、確かに『早や忽ち……』と印刷されていた。裏を返すとマズルカ楽譜出版社の文字が読めた。この社から出版された楽譜はいちおうの権威あるものとして、多くの歌手がテキストとして用いているのである。

だから、久美子が活字を信用しているのは無理のないことだとも言えた。

「はやちというのは疾風のことはやてが忽ち波を吹いたと、こういう意味なのだよ」

しかし勝気な久美子は、そうした教えるような言い方をされることが氣にくわぬようだった。久美子は口をつきだした。

「でもね、『早や忽ち』としても意味はつうじるわ」

夫を見おろして反論した。根が負けず嫌いなたちだから、こうなるといっかな譲ろうとはしない。

「それじゃレコードをかけてみよう。《浜辺の歌》が入っているLPは、二、三種類あるはずだから」

重之もいくらか挑むような口調になると、立ってレコードカードのインデックスをひいた。音楽室の一方の壁はつくりつけのレコード棚になっていて、かなりの数の歌曲が集めてある。

《浜辺の歌》の入った盤は三枚あり、歌手はいずれも女声であった。その三人による《浜辺の歌》を聴き終えると、重之は難しい顔になった。『はやち忽ち……』という歌詞で歌っているのは予期に反してただ一人であり、あとの二人は『早や忽ち……』と歌っているからだっ

た。

久美子は勝ち誇った口調で、「どお？」と問いかけた。

「二対一だもの、あたしの勝ちよ」

「そうじゃないさ。やはりきみが違っている。そう言っているければ、この楽譜が間違っているんだな」

「どうしてよ」

「理由は二つある。一つは歌詞の調子の問題だ。第一節も第二節も、一行目は七五調だろう。『あした浜辺をさまよえば』も『夕べ浜辺をもとおれば』も、七音と五音からできている。とすれば、第三節だって当然そうなるべきなのだ。『はやち忽ち波を吹き』は、ちゃんと七と五の重なりになっているじゃないか。『早や忽ち』では六音だ、七音にはならないよ」

不服気な顔つきをしながら久美子は指を折ってみた。

「でも、それは素人考えよ。なんといったってあなたは詩人じゃないんですからね。俳句だって、かならずしも十七字に限定されてるわけじゃないでしょう？ 字あまりってこともあるわ」

「二番目の理由というのはだね」と、夫は妻の発言を無視した。

「この楽譜どおりの歌詞だとすると、主語がどこかへ行
ってしまふ。主語が不在になるんだ。一体なにが波を吹
くというのかね？」

久美子は返事をしなかった。黙ったままで邪慳じやけんに桜草
の花弁をむしっている。

「それに反してほとくの主張するやつは、疾風はやてが主語だ。

一陣の疾風が忽ち波を吹き寄せる。どうだい？ ちゃん
とした立派な日本語になっているじゃないか」
「文句があるなら出版社に言ったらどう？ あたしを責
めるのはおかど違いってものよ」
「なにも責めちゃいないさ。ただ、正しい歌詞で歌って
欲しいと言ってるだけだ」



「いやよ。あたしは楽譜どおりに歌うから」

「それは困る。あんなわけの判らない日本語を歌われたんじゃない、ぼくまで笑われるからな。亭主はなにをしてたんだってことになる」

「あなたに迷惑はかけないわよ、伴奏者を変えてもらえばいいんだから」

そう言うと、久美子は荒々しく楽譜をとじた。

2

鈴木重之は、鎌倉かまくらの稲村ヶ崎いなむらがさきに住んでいる。練習のあ
る日は、少し遠くて不便だったけれども、東京四谷よつやの新
樹会まで往復しなければならなかった。

《浜辺の歌》で気まずい思いをしてから半年あまりたつた十月初旬の、ある木曜日の夕方だった。一日の練習をすませた重之は、四谷駅から中央線で東京にでた。ここから横須賀線よこすかに乗って鎌倉へもどるのである。一番線のフォームから十三番線のフォームに渡るには、階段をおりて通路をおらなくてはならない。重之は家路をいそぐサラリーマンの群れをかきわけて、八重洲口やえすぐちのほうへ急いでいた。そして何気なく顔を上げたときに、妻によ

く似た女の姿を眼にしたのである。

雨の日だった。女はレインコートを着ている。一瞬、おや、と思った。ラッシュアワールの六時すぎだから、中央通路は混雑している。したがって、その女は、人びとの肩のあいだから後頭部をちらりと覗のぞかせたにすぎない。しかし、自分の妻の髪かみの形を見違えるはずもなかった。三カ月形のヘアピンと、そこにはめ込まれた人造ルビーにも見覚えがある。声をかけようとして一、二歩行きかけたまま、ふたたび足をとめた。その拍子ひょうしに年配の、いかにも疲れきった表情のサラリーマンと肩がふれ、舌打ちされた。

いまだき久美子がいまのところにいるはずがない。他人の空似うつそなのだ。そう思うことによって重之は自分を無理に納得させた。だが、それにしても……と考えてみる。赤いパーバリのレインコートも妻のとそっくりではないか。とすると、やはりあれは久美子なのか。そう思っ
て伸び上がるようにしてうしろ姿を眼で追った。改札口を抜け、地下鉄の階段のほうへ足を急がせている赤いレインコートが、人波のあいだに見えかくれしていた。

久美子は昨年の四月から名古屋にある金鯢きんこ女子短大の講師になり、週に二日教えに行っている。水曜日の朝食

をすませると、東京駅から「ひかり」で名古屋へおもむいて、午後を音楽理論と歌唱の指導にあてる。講習は四時間だけれど、そのあとにいろいろな雑事があって、夕食をとるのが七時すぎになる。夜は短大の寄宿舎に泊まるわけだが、清潔で設備もとのついているというところで、久美子はたいへん気に入っている様子だった。翌日も午後三時まで講義がある。

今年の春のことだが、彼女は眼をかがやかせてこう言った。

「木曜日のお講義のあとでコーラスを教えて欲しいと頼まれたの。千種区ちづぐの団地の奥さまたちなのよ」

「ふむ」

「あたしね、奥さまばかりでなしに、ご主人たちも仲間に入れて、混声合唱団を組織できたら素晴らしいことだと思うんだけど」

「ふむ」

「大阪の素人合唱団で、バッハの《マタイ受難曲》を暗譜でうたえる人たちがいるんですってね。そこまで上達できなくても、オペラのコーラスぐらいまでこなせたら楽しいことだら」

声をはずませている。

「練習は何時までかかるんだい？」

「晩ご飯をすませた後で始めるんですもの、九時頃までかかるわよ」

「すると木曜の夜も泊まるわけか」

重之は顔をしかめた。妻が留守のあいだは、女中を返す子の家に帰しておくことになっている。言ってみれば、久美子が出張しているときの彼はにわかやもめの暮らしをしなくてはならない。なにかにつけて不自由を感じていたけれども、妻のたを思つて多少のことは我慢していたのである。だが、二泊するとなると賛成するわけにはいかなかった。

「いやだな。不自由なことは言うまでもないが、きみがいなくなると家のなかには火が消えたようだ。ぼくひとりになってしまふんだから。きみにこの気持ちは判らないかもしれないが、それは淋しいものだぜ」

「お願い。そうさせて頂戴。その埋め合わせはきつとするから。ほんとよ、約束するわ」

とどのつまりは、女房にあまり亭主のほうが押し切られて、久美子の希望を容れることになった。名古屋には都合二泊するので、帰宅するのは金曜日になる。

「そのかわり急いで帰ってくるわ。名古屋を朝の列車で

発つから、おひるにはもどつてこれるのよ」

久美子は夫に抱きつくつと頬ずりをし、音をたててキスをしたものだつた。

横須賀線の階段をのぼりながら、重之はそのときの情景を思ひうかべ、いま見た女のことを考えていた。ひょっとすると今日はコーラスの練習がなかったのかもしれない。予定を一日はやく切り上げて帰つたのだらう。東京駅に降りたついでにその辺に立ち寄つて、なにか雑用をすませるつもりなのではないか。人違いかどうかは、あとで家に帰つたとき本人に訊ねてみれば判ることだ。重之はそう考へて電車に乗つた。席はほとんどふさがつており、かろうじて腰かけることができた。

しかし妻は、彼の期待を裏切つて帰つてこなかった。重之は、やはり眼の錯覚なのだな、と思つた。

彼が再度そのことを思い出したのは、翌日金曜日の夜、自宅の食堂で久美子と夕食をとつてゐるときであつた。

「今日のステーキどう？」

「そう言つちやわるいが、あまり旨くないね」

「ミルクで育てた仔牛の肉なんですから」

「ことわるまでもないじゃないか。仔牛はみんな母乳で育つに決まつてる」

重之に笑われて久美子も初めて気がついたらしく、つられたように吹きだした。今日の久美子は機嫌がよかった。声をたててよく笑う。

「そう言えばそうだね。でも、ショーケースにはきれいしくそう書いた札がでていたわ。脂身が少なくてコレステロール恐怖症の人に向いてゐるんですって」

「高いんだらう？」

「それが安いよ」

「ほう」

「なんだか特殊な育て方をしたみたいだけど、考えてみれば当たり前のことをしたんだから、安いわけだね。なにしろ、東京駅についたのが正午でしょ。おながすいていたものだから、とてもおいしそうに見えたの」

「正午到着つて、つまり今日の正午だね？」

「決まつてるじゃありませんか。なにおつしやるのよ」

と、久美子はいぶかしそうな眼で夫を見た。

「いや、昨日の夕方きみによく似た女のひとを見かけたことを思い出したんだよ。あやうく声をかけるところだつた」

「あら、何時頃ですの？」

「六時……を少し過ぎていたかな」

東京駅の経験をくわしく語って聞かされると、久美子はほそい眉をよせ、熱心に耳を傾けていたが、そのうちに突然たかい声を上げて笑いだした。

「なによ、人違いじゃないの。ヘアピンにしたって特別に誂あつちえてこさえたものじゃあるまいし、何百何千とおなじ品があるんですからね。アクセサリーひとつであたしと間違えるなんて、ずいぶんそっかしいかただわ。レインコートにしてもそうよ。あなた馬鹿ねえ、声をかけたら、それこそ恥をかくところじゃありませんか」

「それもそうだ、黙っていてよかったよ」

重之はふとい指で顎あごのあたりをなでていた。ピアノストが鍵盤からフォルティシモを叩たたきだすためには、太くてがっしりとした強靱きやうじんな指が必要なのだ。

「だが、ヘアピンだけじゃなかったよ。髪かみの形から身長まできみにそっくりだった」

「靴が見えたの？」

「いや」

「それじゃハイヒールをはいているんだか、中ちゆうヒールをはいているんだか、はっきりしないじゃないの。身長が判わかるわけがないでしょ」

「それもそうだね」

重之はまた顎をなでた。やはり他人の空似だったのか、と思った。それにしても、亭主である自分が錯覚したほどのことから、世間には似た女がいるものだ。

「そんなひとに限って、正面からみるとがっかりするほど似ていないものよ。すみませんが、角砂糖をもうひとつ入れてくだらない？」

そう言うのと、久美子は紅茶のカップを前に押してよこした。この話はそれきり二度と夫婦の口にはのぼらなかった。重之はそのとき限りですっかりこの出来事を忘却してしまっていたのである。

3

年が明けて、二月中旬のことだった。その日は、練習のスケジュールの都合で久美子だけがさきに家をでた。放送局の依頼で、ブラームスとトゥルンクの歌曲を録音することになっていたので。いずれも渋い内容だが、とくにトゥルンクの作品は日本ではほとんど知るひともない。久美子は、ブラームスよりもトゥルンクを歌うことに意欲を燃やしているようにみえた。

重之のほうもそろそろ、家をでる時刻が迫ってきた。

庭でチューリップに肥料をやっていた彼は、手を洗って二階に上がると、往復の横須賀線の車中で読むために、ちかごろひどく評判のいい時代物の小説を鞆かばんに入れようとした。買ったきりまだ読んでいない新刊本は、書棚の左端にまとめてならべておくことになっている。が、いくら探さがしてみても見つからなかった。十分ちかく辺りを探しまわってから、ようやく久美子が言っていたことを思い出した。名古屋へ出張した帰りに、新幹線のなかに忘れてきた、というのである。

そのときは苦笑しただけでかく聞きながした。どうせ誰かが持っていてしまったに違いないと考え、諦めあきらていた。けれども、いまは違う。読みたいと思った本がないとなると、無性に欲しくなる。紛失した久美子の行為そのものまでが腹立たしくなってくるのだった。

どちらかという、重之は読書好きだった。書物も、比較的たくさん買うほうである。だが、おなじ内容の本に二度も金を払うことは気がすまなかった。失われた本に重之は執着しゅうちやくしていた。

すでに久美子は誰かに持ち去られたものと考え、諦めている。しかし、かならずしも持ち去られたものとは限らない。ひょっとすると東京駅の遺失物係に保管されて

いないものでもない。彼はそう思いなおした。もしそうだとすれば、巻末の見開きのところには《鈴木藏書》の大きな朱印がおしてあるから、名乗っていけば返してくれるに違いない。重之は、電車が東京に着いたらすぐにも遺失物係をたずねることに決めて家をでた。

東京駅の遺失物保管所は丸ノ内側にある。

「新幹線のなかに本を忘れたのですが……」

自分が忘れてきたような顔をして言った。正直に代理人だと告げれば、本人でなくては駄目だと断られる心配があったからだ。

「どんな本ですか」

彼は書名のほかに、《鈴木藏書》の朱印がおしてあることをのべ、定期券をだして自分が当人であることを立証した。

「何日の「ひかり」でしたか」

「一月十九日、金曜日です」

答えてしまってから、曜日まで言う必要はなかったと思つた。

「「ひかり」何号の、どの車輛しやりようでしたか」

追いかけるように係員は訊ねた。だが重之は、久美子が「ひかり」何号に乗るかは聞いていない。ただ漠然と、

正午頃に到着することを承知しているだけである。

「新幹線はしばしば利用するものでね、はてな、あの日の「ひかり」は何号だったかな」

重之は追及から逃がれようとして、曖昧な言い方をした。

「とにかく、一等の指定席でした」

これは、毎回久美子が乗る車輻だった。講師になりたての頃にたまたま混んだ列車に乗り合わせ、名古屋まで立ちつづけたことがある。それにこりた彼女は、以来かならず指定席に坐ることになっているのだ。

重之の返答に、どうやら相手は満足したらしかった。

「ま、蔵書印もあることだし、よろしいです。おき忘れてあったのは一月十八日で、列車は「ひかり」30号でしたよ。では、こちらの帳簿に住所氏名を書いて、印をおしてください」

「……」

ちよっとの間、彼は返事をわすれていた。

「拇印でも結構ですよ」

そう言われ、はっとして我れにかえった。財布からとりだした印鑑を、そくさと肉皿におしつけた。

札をのべ、改札口にもどりながら、重之は晴れぬ顔つ

きで小首をかしげていた。この本が十八日の「ひかり」に遺留されていたというのは、とりもなおさず、久美子とその日に帰京したことを意味する。それでいながら、鎌倉の家にもどったのは翌の十九日の金曜日なのである。ぼっかりと穴のあいたまる一日の空白を、妻は東京のどこで、なにをして過ごしたのだろうか。それに加えて、重之は「ひかり」30号という一語にもひっかかりを感じていた。30号の東京着は正午ではなく、夕方ではないだろうか。

人混みをかきわけて時刻表掲示板の下まで行った。見ると、思ったとおり30号の到着時刻は十八時十分となっている。もはや、久美子が嘘をついていることに間違いはなかった。久美子は木曜日の午後六時すぎに帰京していながら、夫に対しては、金曜日の正午に着いたようにみせかけているのだ。だが、それは単にその日だけのことだったのだろうか。

木曜日の午後六時……。胸のなかでそうくり返したとき、不意にひらめいたものがあつた。去年の秋、東京駅で久美子に似た女を見かけたのも、おなじ木曜日の午後六時頃ではなかったか。曜日も合っていれば、時刻も一致している。この意外な発見はショックだった。あのと